専門医が診る

広島大病院
茶山一彰病院長

ちゃやま・かずあき　1955年鳥取県生まれ。81年広島大医学部卒。虎の門病院（東京）内科医長を経て、2000年広島大医学部教授。11年4月に病院長に就任。日本肝臓学会専門医・指導医。

専門はウイルス肝炎治療。日本に存在するC型肝炎ウイルスのタイプについての研究を深め、インターフェロン治療による効果を明らかにした。C型肝炎患者へのインターフェロン導入は通算1125例。

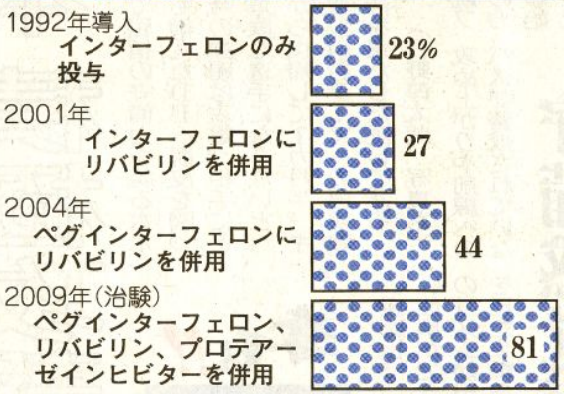
FILE 1

国内では100万～200万人がウイルスを持っているとされるC型肝炎。放っておけば、患者の1割が肝不全になり、肝がんにもつながるという。広島大医学部教授（内科学）で、広島大病院の茶山一彰病院長に、最新の治療法や感染のメカニズムを聞いた。（標葉知美）

C型肝炎

3薬併用で治癒率向上へ

インターフェロン治療の変遷と広島大病院における1b型C型肝炎の治癒率



―C型肝炎の治療は進化しているそうですね。

現在、C型肝炎の治療で最も一般的なのは、抗ウイルス作用のあるペグインターフェロンとリバビリンの併用療法です。難治性の「1b」型の患者に対し、1週間に1回、48～72週間続けて注射します。

6種類のC型肝炎ウイルスのうち、日本人患者の7割が感染するのが1b型です。1b型の治癒率は、抗ウイルス作用のあるタンパク質のインターフェロンだけを投与していた時は1、2割ほどでしたが、この併用療法が2004年に導入されて4割に向上しました。

―今後も治療法は進展しそうですか。

11月から、ウイルス増殖に必要な酵素の働きを妨ぐプロテアーゼインヒビターとペグインターフェロン、リバビリンの3薬の併用が可能になります。そうなると1b型の治癒率は7割以上に向上するといわれています。

ただインターフェロンを使った治療はいずれも発熱や頭痛、脱毛などの副作用があります。体質が合わない人、体力のない人は医師と相談しながら治療することが必要です。

また、2、3年後には、インターフェロンを使わずに飲むだけでC型肝炎を治せる薬の登場が見込まれ、治験が進んでいます。インターフェロンの治療で副作用が強い患者さんの中には、療養しながら新薬の開発を待つ人も出てきています。

―そもそもC型肝炎はどんな病気ですか。

C型肝炎ウイルスが血液感染し、肝臓で慢性の炎症を引き起こす病気がC型肝炎です。1989年にウイルスが発見されるまでは手術時の輸血、血液製剤の投与で多くの人が感染しました。60代以上の患者が多いのはそのためです。

使い捨て注射針を使うことにより、輸血などによる感染の可能性はほぼなくなりました。現在の感染の多くは、使い回した針での覚せい剤の注射や入れ墨、ピアスの穴開けによるものです。

慢性のC型肝炎に自覚症状はほとんどありません。しかし、放っておけば肝臓内の炎症が悪化して肝臓の組織が硬くなる肝硬変や、肝機能が低下する肝不全を引き起こします。また、国内で年間3万人が死亡するといわれる肝がん患者の7割はC型肝炎が原因です。

―怖い病気にどう対処すればいいですか。

血液を調べればすぐに感染の有無が判明します。特に患者が多い60～70代の方には血液検査を勧めています。広島大病院の「肝疾患相談室」では無料の血液検査を実施し、専門の看護師や医師が相談に応じています。心配な方は、かかりつけ医か相談室で診てもらいましょう。相談室☎082（257）1541。

ここがポイント

C型肝炎は今後、新たな治療法や新薬の登場で、かなり治りやすい病気になります。特に中高年の方は1度血液検査を受けて、感染の有無をまず確認しましょう。

質問や相談募集

「専門医が診る」では、中国地方で活躍する専門医に最新の治療法や病気の正しい知識を解説してもらいます。

C型肝炎について茶山病院長への質問や相談を募集します。郵便、ファクス082(291)5828、メールkurashi@chugoku-np.co.jpで、中国新聞文化部「専門医が診る」係まで。12日必着。掲載は匿名ですが住所、名前、性別、年齢、職業、連絡先を明記してください。